

研究報告

看護学生の子どもの理解を促す教育方法の試みとその効果 — 親子の協力を得た身体計測・発達評価演習 —

小川純子¹ 伊藤奈津子¹ 鵜野澄世¹ 安藤涼²
淑徳大学看護栄養学部¹ 千葉大学医学部附属病院²

A trial and effect study on pediatric nursing education to promote nursing students' understanding of children: parent-child participation when conducting physical measurements and the development of evaluation exercises

Junko Ogawa¹, Natsuko Ito¹, Sumiyo Uno¹, Ryo Ando²
¹School of Nursing and Nutrition, Shukutoku University
²Chiba University Hospital

要旨

【目的】本研究の目的は、親子の協力を得た“身体計測・発達評価演習”の学生の学びを明らかにし、対象理解や関わり方の実践能力を養う教育方法を検討することである。

【方法】2年次後学期科目である小児看護援助論Ⅰにおいて①基本的な技術の習得、②受け持ち事例に関わる準備、③④実際の親子が参加しての身体計測と発達評価演習、⑤実際の子どもの身体計測と発達評価を通しての学びの共有の5コマ(90分/1コマ)で構成した“身体計測・発達評価演習”を開発した。2019年度の淑徳大学看護栄養学部2年次学生のうち研究協力に同意が得られた69名(66.3%)の事後レポートの記述を対象とし、質的に分析した。

【結果】学生の学びに関する218の記述から15サブカテゴリ、4カテゴリが抽出された。学生は、【体験を通しての実感】を得られたことで【対象理解】や【対象との関わり方】、【身体計測・発達評価の効果的な方法や工夫】の理解につなげることができていた。

【結論】学生は、直接子どもと親と関わり、子どものリアルな反応に直面することで、子どもの特性と成長・発達段階を肌で感じる機会になり、理解を深めることができた。

キーワード：小児看護学、演習、親子の参加

Key Words: pediatric nursing, exercises, parent-child participation

I. はじめに

近年、少子化の影響などもあり、子どもとの接触体験が少ない学生も多く、子どもとその家族と接することに不安や緊張を感じる学生も少なくない(西田, 北島, 2005)。一方で、医療現場では在院日数の短縮化や小児科の縮小などにより、小児看護の実習の場は外来や子育て支援センターな

ど、年々病棟から拡大しており(宮谷, 大見, 宮城島2013)、小児病棟で1人の患児を受け持ち、子どもと関係性を築きながら成長発達段階や病態を理解し、看護の援助技術を学んでいく従来型の実習を行うことが困難な状況がある。このような状況から、看護教育の現場では、学内で講義と演習を組み合わせることで効果的に学習を促すことが求められている(厚生労働省, 2019)。基礎看護学領

域、成人看護学領域、老年看護学領域などの、大人が看護の対象者である領域では、模擬患者を取り入れた演習が多く多くの大学で取り入れられているが、小児が看護の対象者である小児看護学領域において、実際の小児に協力を得て行うプログラムに関する報告は非常にまれである（吉川，青野，田中ら，2016；柳，2010）。

本学のシラバスにおいても、病棟での受け持ち実習の前に保育園などの健康な子どもと触れ合うプログラムは設定していない。また、小児看護学実習においても重症心身障がい児を受け持つ学生が全体の3割、学童期以上の年長児を受け持つ学生が4割程度を占め、特に成人と異なる関わりが求められる乳幼児を受け持つ学生は3割程度にすぎない。

そこで、学生が子どもの反応を体験し、適切な援助を学ぶ方法として、身体計測とデンバーIIを用いた成長発達評価演習に実際の親子に協力を得る教育方法を試みた。デンバーIIは、0歳から6歳までの子どもの発達判定法であり、子どもの異常を早期に発見する一次スクリーニングで用いられるものである。本研究の目的は、親子の協力を得た身体計測・発達評価演習（以下身体計測・発達評価演習）の振り返りと学びを記述した事後レポートから、子どもとその家族への関わり方と対象理解に関する学びを明らかにすることであり、その結果を基に、子どもとその家族の対象理解や関わり方の実践能力を養う教育方法を検討したのでここに報告する。尚、本研究における「子ども」は、今回の演習の対象である未就学児を指すこととする。

II. 研究方法

1. 身体計測・発達評価演習プログラムの開発

1) 小児看護学における“身体計測・発達評価演習”の位置づけ

本学の小児看護学のカリキュラムは、2年次の前学期に小児看護学概論（16時間1単位）・後学期に小児看護援助論I（30時間1単位）・3年次前期に小児看護援助論II（60時間2単位）、3年次後期に小児看護学実習（90時間2単位）で構成している。小児看護学概論では、小児看護学の基

盤となる〔小児の成長発達〕〔小児の権利・倫理的態度〕〔関連理論〕を、小児看護援助論Iでは、〔小児と家族のアセスメント〕〔小児の症状の特徴と看護〕を、小児看護援助論IIでは〔疾患・障がいをもつ小児の看護〕〔看護過程〕について学修する。

“身体計測・発達評価演習”は、小児看護援助論Iの一部である。小児看護援助論Iは、アセスメントと対症看護「看護の対象である小児と家族のアセスメント方法について学ぶ」ことを学修目的の一つとしている。本演習では、概論で学んだ小児の成長発達の知識を元に、援助論Iの講義で学んだ小児と家族との援助関係の構築の知識を体現し、3年次の看護過程と実習につなげることをねらいとする。

2) “身体計測・発達評価演習”プログラムの実際

本演習の開発にあたっては、科目の目的に照らし合わせると共に、小児看護学領域において模擬患者を用いた教育方法（西田・合田・中尾，2019；松澤・白木・眞崎，2021）に関する文献をレビューし、複数の教員で検討を重ねた。演習は、表1に示したように、①基本的な技術の習得、②受け持ち事例に関わる準備、③④実際の親子が参加しての身体計測と発達評価演習、⑤実際の子どもの身体計測と発達評価を通しての学びの共有の5コマ（90分/1コマ）での構成とした。尚、実際の親子と関わる演習の事前準備として、乳幼児期の子どもの①認知発達、②コミュニケーション・言葉の理解、③子どもの日常生活の自立度、④遊びの特徴に関するレポートと、⑤乳幼児の行動から、年月齢を推察するという夏期課題を課した。

“身体計測・発達評価演習”で実際に関わらせて頂く子どもは、学生が工夫をしてコミュニケーションをとる必要がある生後6か月～就学前までの乳幼児とした。また、個々の学生が主体的に役割を果たせるように、かつ乳幼児期の子どもに恐怖心を与えないように、1グループの人数は、4名～5名とした。当日は、器具の数・種類の関係上、全体を2つのグループに分けてAグループは身体計測から行い、Bグループは発達評価から行なった（表2）。

家族のリクルートは、ちらしを作成し、本学の卒業生、小児看護学の教員の知り合い、実習病院

表1 親子に協力を得た身体計測と発達評価演習のスケジュールと内容

時間数	演習の目的	演習内容
1コマ目	演習①：技術演習 目的：身体計測と発達評価の方法を学ぶ	<ul style="list-style-type: none"> ● 1学年を2つのグループ(A/B)に分ける。 ● A/Bグループの中でさらに4-5人の小グループに分ける ● 【デンバーⅡを用いた発達評価(45分)】と【モデル人形を用いた身体計測(45分)】について講義・技術演習方式で教授する。
2コマ目	演習②：事前準備 目的：受け持ちの子どもと家族との関わり方・身体計測と発達評価の方法を考える	<ul style="list-style-type: none"> ● 適した身体計測・デンバーⅡの方法・関わり方の工夫・親子との事前面談で知りたい内容について話し合う。 ● グループで実施方法・注意点などを記録用紙に記述し、実施担当者を決める。
3コマ目 4コマ目	演習③④：実施当日 目的：実際の親子に関わり身体計測と発達評価を行う	<ul style="list-style-type: none"> ● 4-5人で1組の親子を担当する。 ● 親子のことを知り、子どもと仲良くなるために、事前面談を行う。 ● 身体計測(頭囲・胸囲・身長・体重)とデンバーⅡを用いた発達評価を行う。
5コマ目	演習⑤：振り返り 目的：身体計測・発達評価演習を振り返り、学びを共有する	<ul style="list-style-type: none"> ● ③④を実施したグループで、「事前に計画した方法」や「実際の関わり」について振り返る。 ● 他の発達年齢を担当した学生とグループを組みなおし、異なる年齢で実施した体験を共有する。 ● 事後課題として、個人で最終レポート(A4 1枚)を記述する。

表2 実際に親子と関わる演習③④のスケジュール

時間	Aグループ	Bグループ
9:00～9:30	グループ毎に最終確認	
9:30～9:40	協力親子への挨拶と流れの説明	
9:40～10:00	1-204 講義室 親子とのコミュニケーション 家庭での様子等の面談	ラーニングcommons 親子とのコミュニケーション 家庭での様子等の面談
10:00～10:40	身体計測の実施 2歳以上：母性小児看護実習室 2歳未満：地域実習室	デンバーⅡの実施 1. 記録表に必要事項を記載 2. 予備判定票を用いて話を聞く 3. デンバーの器具を用いて実施 4. 実施した項目に○を付ける
10:40～10:50	ラーニングcommonsへ移動	母性小児看護実習室/地域実習室へ移動
10:50～11:30	デンバーⅡの実施 1. 記録表に必要事項を記載 2. 予備判定票を用いて話を聞く 3. デンバーの器具を用いて実施 4. 実施した項目に○を付ける	身体計測の実施 2歳以上：母性小児看護実習室 2歳未満：地域実習室
11:30～11:40	親子へのお礼・挨拶	
11:40～12:10	会場の現状復帰・2-201教室へ移動	

の看護師などに依頼した。ちらしには学生の学習状況や技術の習得が未熟であること、演習で得られた情報に関する個人情報保護などの倫理的配慮に関することを記述した。依頼内容は、①学生による身体計測(身長・体重・胸囲・頭囲)、②学生による発達評価(デンバーⅡを用いた発達判定)、③子育てについてのお話とし、約2時間の協力への謝礼を準備した。

2. 研究対象者

研究対象者は、A大学において2019年度に開講された「小児看護援助論Ⅰ」の履修学生104名のうち、研究への同意が得られた69名とした。演習終了後に提出された課題レポートのうち、研究協

力への同意が得られ、匿名化して再度提出されたレポートのコピーを分析対象とした。

3. 調査期間

調査期間は、2019年9月から2020年1月であった。

4. 調査方法

本演習が含まれている科目である小児看護援助論Ⅰの最終講義終了後に、“身体計測・発達評価演習”のレポートを返却し、文書と口頭で研究に関して説明した。研究参加に承諾する学生には、課題レポート返却時に添付したレポートのコピーから学生氏名が記載されている部分を切り取り、匿

名化したものを提出してもらった。尚、提出ボックスは教室外に設置し、提出期間を説明時から1週間と設定した。

5. 調査内容

演習の最終レポートの課題である「自分が行った役割を振り返り、印象に残った子どもとのやり取りの場面とそこからの学び」と「共有ワークからの学び」に関する記述のうち、本研究では、「自分が行った役割を振り返り、印象に残った子どもとのやり取りの場面とそこからの学び」の記述のみを分析対象とした。

6. 分析方法

記載された学生の学びの内容を意味内容がわかるようにコード化した。コード化した学生の学びを意味内容の類似性と相違性を類別し、サブカテゴリ、カテゴリにまとめた。分析に当たっては、小児看護学の教育・研究・実践経験に長けた複数のメンバーで行った。

7. 倫理的配慮

本研究は、淑徳大学看護栄養学部研究倫理審査委員会の承認（N19-09）を得て実施した。本研究は、科目の担当者である教員が、受講者である学生を対象に行う研究であるため、研究への参加において教員の強制力が働かないように、「小児看護援助論Ⅰ」における単位の取得や成績とは一切無関係であり、研究への参加・不参加により研究対象者が不利益を受けることはないことを依頼時に文書と口頭で説明した。さらに、研究協力への承諾の有無が教員に知られないように、研究同意を示す課題レポートのコピーを提出するボックスは教員の目の届かない場所に設置した。さらに、ボックスからのレポートの取り出しは成績処理後に行う事、レポートのデータ化は教員以外の者が行うこととし、学生にも説明した。

尚、外部から親子に協力を頂く演習であるため、看護学生として守るべき守秘義務について説明すると共に、演習で得た個人情報（氏名・年齢・居住地など）は授業の目的以外では一切口外しないこと、氏名以外の学生自身の個人情報についても

相手に伝えない事などを親子と直接関わる演習の前に指導した。

III. 結果

1. “身体計測・発達評価演習” の実際

演習①基本的な技術の習得は、104名の学生を52名ずつに分け、さらに1グループを4-5名に分けて演習を実施した。【新生児モデル人形を用いた身体計測（45分）】では、身長・体重・胸囲・頭囲を測定し、カウプ指数の計算と体格の評価を行った。【デンバーⅡを用いた発達評価（45分）】では、1グループにデンバーⅡ判定用具を1セットずつ配布し、道具を確認すると共に、教員が実際に評価判定している自作のDVDを用いて、学生各自で判定票への記入を行った。

演習②の前に親子の協力を募り、26組の協力を得ることが出来た。年齢は平均35.0か月（7か月～6歳5か月）、男児10名女児16名であった。そこで演習②では、学生を26グループに分けて受け持ち事例に関わる準備を行った。学生は担当となった子どもの日常生活・遊び・認知発達などを概論で学んだことを基盤にイメージすると共に、身体計測と発達評価について方法と当日の担当を決め、手順と留意点を紙面に記述した。ほとんどのグループが4名であり、演習③④の当日には全ての学生が何かしらの役割を果たす必要があり、どのグループも真剣に準備をしていた。

演習③④の当日に3組の親子の欠席があり、12名の学生は予定していたグループ以外の親子と関わることになった。最終的な子どもの年齢は平均35.4か月（9か月～6歳5か月）、男児9名、女児14名であった。できるだけ演習②で準備していた子どもの年齢と近いグループに振り分けるようにした。準備していた子どもの年月齢との差は、最大5か月であった。小児看護学の教員3名と大学院生は、4つの部屋をひとつずつ担当し、主に子どもの安全に留意して関わった。体重計に乗ることを嫌がり泣いてしまったり、発達評価をしている間に眠くてぐずってしまったりなど、学生に関わりに苦慮している場面では、一部教員の支援が必要なものもあった。多くのグループにおいては、一緒にいる親からの支援だけで、学生は子どもと

関わる事が出来ていた。胸囲・頭囲測定においては、正しく測れていないグループが複数見受けられたが、正確に測ることよりも子どもと親との関りからの学びに重点を置いたため、教員が測定を手助けすることで子どもへの負担が大きくなるように配慮した。参加した親からは、「これから何をするか、子どもにちゃんと説明してくれたので、本人も安心して出来た」「一つ一つ褒めてもらって、本人はとても嬉しそうだった」など、8割以上の親が学生に安心して任せられたと評価していた。

演習⑤では、参加した親御さんのアンケート結果を学生に伝えた後で、演習③④を行ったグループでの振り返りとグループをシャッフルしての異なる年齢の子どもとの関わり体験の共有ワークを行った。

2. 学生の学び

研究への同意が得られた69名の学生の課題レポートの記述から、278の記述が得られた。278の記述のうち、子どもとその家族への関わり方と対象理解に関する学びに関する218の記述について、類似性と相違性を検討して分析した結果、コード数は51件、15サブカテゴリ、4カテゴリが抽出された(表3)。以下、文中の【 】はカテゴリ、〈 〉はサブカテゴリ、[]はコード「 」はレポートの記述(斜体)を示す。

【対象理解】に関する記述数は74、11のコードから2つのサブカテゴリに集約された。学生は、子どもとの関わりを通して、「担当した子どもは4歳ながらも5、6歳で出来る内容もできており、子どもにより違いがあると分かった」「普段一緒に過ごす人や、信頼している相手が近くに来たことで活発に動けたり嬉しそうなる表情になる」「ずっと動いている子どもを見て、子どもってこういうものなのだと実感した」「歳が小さいほど純粋に早く心を開いてくれるのではないかと思った」「微細運動の測定では言葉を簡単な言葉に言い換えなくても理解していた」など、〈子どもとの関わりから得た子どもに関する理解の深まり〉が見られた。また、「すごく泣いていたが、徐々に泣き止んでいったので普段からお父さんは良く育児をしているため、

愛着関係が築けているのだと感じた」「子供だけとのやり取りだけでなく、両親とのやり取りの中で子どもとの関わり方の工夫を知った」など、[親子のやりとりからイメージできる日常の関係性]をアセスメントしたり、[親とのやりとりから理解する親の子どもへの接し方]など、子どもと親の両方を〈親子との関わりを通じた情報収集による対象理解〉出来ていた。

【対象との関わり方】に関する記述数は93で最も多く、18コード、6つのサブカテゴリが抽出された。「子どもがずっと泣いており、知らない環境に連れてこられ、緊張していると考えた。デンバーの測定を場に慣れてから行えばよかったと思った」などの[子どもの不安を軽減する環境づくりの必要性]、「ちょっとしたことでも言葉にしてほめることで子どもも嬉しそうに笑顔になり、自分から体重計に乗ってくれた」などの[主体性を促す子どもへの称賛]、「事前に母親から聞いていた情報から、身体測定時に一人で衣服の着脱を行ってもらった」などの[親からの情報を活用した子どもとの関わり方]、「会話中の表情や声の抑揚から好きな物・事をくみ取り、こちらから話題を振ることで心を開いてもらいやすくなる」という[子どもとのコミュニケーションに必要な積極的な関わり]などから抽出された〈子どもや家族の状況や言動に合わせた対応〉〈子どもの状況を予測した関わり〉〈子どもとの関係性を築くための関わり〉〈子どもに親しみのある言語を用いた関わり〉という子どもと家族との関りを進めたり深めたりする関り方に加え、「また自分が緊張していると相手の子供に伝わる可能性が考えられるため、まず自分がリラックスして子供の測定を進めていくことが大事だと感じた」などの〈対象者に伝播する学生の緊張〉や「なんでも口を持っていく発達段階であったため、積み木をすぐにしまう事故予防を行った」などの〈発達段階に合わせた安全への配慮の必要性〉についても学ぶ機会になっていた。

また、本演習は、身体計測と発達評価という看護技術を行う場でもあり、「測定後に時間がかかってしまった事を反省し、イメージトレーニングの必要を感じた」「事前に学習していたことで、実際に関わり生活について知り、なぜそのような生活

になるのかを改めて考えることができた」などの「正確な評価を行うために必要な知識と事前準備」や「子どもが好きなものを見せたり鳴らしたりして子どもの気をまぎらわせると、計測がスムーズにでき、正しく測定できるようになる」などの「正確な評価を行うための環境作り」など、【身体計測・発達評価の効果的な方法や工夫】についても学ぶことが出来ており、25の記述から13のコード、4つのサブカテゴリが抽出された。

さらに学生は、実際の親子に関わることで、「子どもが母親の陰に隠れる・話しかけられると逃げるなどの行動から、うまく関わっていけないのか不安になった」など「子どもの反応に伴い生じた困難感」や「子供の顔から笑顔が見られたり、たくさん話しかけてくれるようになって、私自身の緊張が解けたのと同時に嬉しさがあった」などの〈子どもの反応に伴い生じた喜び〉を経験し、〈演習で得た小児看護への理解・意欲〉など、【体験を通しての実感】を得ており、26の記述から8つのコード、3つのサブカテゴリが抽出された。

IV. 考察

1. 実際の親子と関わることでの学生の学び

学生は、実際に乳幼児とその親と関わることで、小児看護の対象者である子どもと家族の両方の【対象理解】【対象との関わり方】、本演習で提供した技術に関連した【身体計測・発達評価の効果的な方法や工夫】について多くの学びを得ていた。特に今回は“身体計測・発達評価演習”であったため、〈子どもとの関わりから得た子どもに関する理解の深まり〉に含まれる「子どもの発達理解」に関する記述が29と最も多かった。次に記述が多かったのは〈子どもや家族の状況や言動に合わせた対応〉の「子どもの特徴を捉えた関わり工夫」であり、全部で100分程度という決して長い時間の関わりではなかったが、学生は目の前にいる子どもの特徴を捉えることの重要性や意味を実感することが出来ていた。さらに「子どもってこういうものなのだと実感した」などの「子どもとの関わりから実感した「子ども」の生態」に関する記述も13あったことから、子どもとの直接的なやりとりや観察をすることで、成人とは異なる『子

もらしさ』を肌で感じる機会になっていた。小児看護の実践は、成長発達の特徴を理解し、『子ども』をイメージ出来ることが基盤となる。学生は、実際の子どもと直接関わる中で、子どもの発達、個性の有無、子どもの行動特徴などを理解し、子どもに対する対象理解を深めることが出来ていた。この結果は、実際の乳幼児に対してバイタルサイン測定と身体計測を行う学内演習をした学生の、『子どもは不安や緊張・恐怖を感じやすく、泣いたり拒否したりする』『子どもはじっとしてられない』などの子どもの特徴に関する学び（吉川、青野、田中ら、2016）と同様であり、看護技術を媒介にした関りであっても、実際の子どもと関わる体験は、学生の子どもに関する理解を深める効果があると評価できる。特に、〈子どもや家族の状況や言動に合わせた対応〉〈子どもとの関係性を築くための関わり〉〈子どもに親しみのある言語を用いた関わり〉など、子どもや家族に配慮した関わり工夫の必要性に関する学びは、小児看護学教育における『態度』に関連する学びである。『態度』に関する学びは、実際に子どもや家族とコミュニケーションをとったからこそ得られた学びであり、病棟や外来における小児看護学実習での学び（山本、上山、2016）と共通するものであった。訓練を受けた模擬患者を親として技術演習に参加してもらった報告（兒玉、納富、藤丸、2009）では、模擬患者から個々の学生がフィードバックを受けることで、コミュニケーションの難しさの再確認ができていた。本研究における学生の自らの行動の反省的表現は「子どもに伝わる学生自身の緊張」と「子どもとの関わりを改善するための振り返り」の2つであった。今回の演習では、参加してくれた保護者からの評価は、オンラインのアンケートフォームに記入して頂く方法で行い、学生個々の言動へのアドバイスを頂く時間は設けていなかった。個別にフィードバックをもらうことの意義や目的、必要性については、今後の検討事項の一つである。

また、今回技術として提供した身体計測と発達評価に関して、正確な評価の為には、学生自身が必要な知識と技術を身につけ、事前準備を行うことが重要であることを学ぶ機会にもなった。学生

表3 子どもとその家族への関わり方と対象理解に関する学び

カテゴリ	サブカテゴリ (15)	コード (51)	
対象理解	子どもとの関わりから得た子どもに関する理解の深まり	実際に関わることによる子どもの個別性の理解	7
		子どもの発達を理解	29
		子どもとの関わりから実感した「子ども」の生態	13
		子どもの行動特徴の理解	8
		環境が子どもの成長発達に与える影響	4
	親子との関わりを通じた情報収集による対象理解	子どもの発達を踏まえた適切な関係性	4
		親子のやりとりからイメージできる日常の関係性	3
		関わる人での子どもの様子の違い	2
		親子のやり取りを通しての情報収集	1
		親とのやりとりから理解する親の子どもへの接し方	1
対象との関わり方	子どもや家族の状況や言動に合わせた対応	子どもとの関わりを通じた情報収集と活用	1
		子どもの特徴を捉えた関わり工夫	18
		主体性を促す子どもへの称賛	9
		子どもの不安を軽減する環境づくりの必要性	6
		子どもの状況に合わせた臨機応変な対応	6
	子どもの状況を予測した関わり	子どもの不安や緊張を軽減する声掛け	6
		計測や発達評価を子どもが楽しめる関わり工夫	5
		親からの情報を活用した子どもとの関わり方	5
	子どもとの関係性を築くための関わり	身体計測に伴う苦痛を最小限にする関わり	4
		身体計測に伴う苦痛を最小限にする工夫	3
	子どもに親しみのある言語を用いた関わり	子どもの発達を踏まえた適切な関わりによる効果	3
		子どもとのコミュニケーションに必要な積極的な関わり	1
	対象者に伝播する学生の緊張	子どもに関心を寄せていることを五感で示す関わり	2
		親しみのある言語を用いた関わり方	9
		子どもが理解できる言葉の使用	3
		子どもにとってイメージしやすい言葉を用いたコミュニケーション	3
		発達段階に合わせた安全への配慮の必要性	6
		子どもに伝わる学生自身の緊張	3
身体計測・発達評価の効果的な方法や工夫	発達段階に合わせた安全への配慮の必要性	子どもの理解度や安全を考えた関り	1
		発達評価における発達の連続性の理解の必要性	2
	発達領域の連続性の理解と実感	発達領域の連続性の理解	2
		事前学習における準備不足	5
		技術に関する知識の必要性の認識	2
		事前学習や準備の必要性の実感	2
	正確な評価を行うための必要な知識と事前準備	子どもとの関わりから気づく評価指標の限界	1
		苦痛を最小限にするための技術の準備の必要性	1
		正確な評価のための子どもとの関係構築の必要性	2
	正確な評価を行うための環境作り	適切な検査方法の実施のための子どもの心理的準備	2
正確な評価のための環境作り		1	
正しい発達評価のための多面的な観察の必要性		1	
正確な評価を行うために必要な技術	成長評価のために必要な正確な測定技術	2	
体験を通しての実感	デンバーII発達評価の適切な実施	2	
	演習で得た小児看護への理解・意欲	演習で得た小児看護への意欲	4
		小児に関わる看護師のイメージ化	1
		子どもの意思を尊重しなければならない強い思い	1
	子どもとの関わり方の振り返り	子どもとの関わりを改善するための振り返り	2
		子どもの反応に伴い生じた困難感	7
	子どもの反応に伴い生じた学生の感情の変化	子どもの反応に伴い生じた喜び	6
		子どもの理解不足に関する予期的不安	4
		できなかったという学生の思い	1

は、身体計測や発達評価を行う中で、[子どもの反応に伴い生じた困難感] [子どもの理解不足に関する予期的不安] [できなかったという学生の思い] などの上手いかなかった体験から、自身の未熟さに気づき、学修の必要性を実感することが出来た。「今後の実習で活かすことができると思う」と記述した学生もおり、臨地実習で疾患や障がいがある子どもと関わる前に、正確に評価することの重要性と技術や知識に関する事前準備の必要性を実感したことは、臨地に向けた学生の自己学修の動機づけになる。

さらに学生は、〈演習で得た小児看護への理解・意欲〉〈子どもとの関わりへの振り返り〉〈子どもの反応に伴い生じた学生の感情の変化〉の3つのサブカテゴリを含む【体験を通しての実感】についても記述していた。学生は、子どもと家族と関わったり、実際に身体測定や発達評価を行わせてもらう中で、困難や喜びを感じるという自分自身の気持ちが揺さぶられる体験や、小児看護への興味関心を高めていた。さらに、このような体験の実感が、対象に合わせた関わりや看護技術の工夫を促し、対象者に適した関わりの実践につながったのだと考える。

2. 子どもとその家族の対象理解や関わり方の実践能力を養う教育方法

本演習の中核的方法は、身体計測・発達評価演習に実際の親子の協力を得たことである。学生の最終レポートの記述から、今回開発した演習プログラムは、学生の対象理解の促進と対象との関わり方の育成に効果があったと考えられる。

人形モデルを用いた技術演習は子どものイメージ化を図る有効な教授方法であるとされ(糠塚, 平元, 2004)、本学の演習においても、身体計測、バイタルサイン測定、ハイリスク児の看護、看護過程などの演習において低出生体重児、乳児、幼児、学童など、発達段階が異なるモデル人形を用いて演習を行ってきた。教員が子ども役になってロールプレイをしてみせることもあるが、リアリティがないため、学生の事前準備は十分とは言い難い。吉川らの論文においても、実際の乳幼児に対して技術を行う事で、学生は子どもが人形と違

って泣いたり動いたりぐずったりすることに戸惑い対応に難しさを感じながらもケアの実際を学んでいた(吉川, 青野, 田中ら, 2015)。実際の子どもの関わることで、困難感や不安を感じることで、演習が実体験となり、学びにつながった。

演習では、子どもの日常生活の理解と子どもとの関係性を深める目的で、身体測定と発達評価の前に親を対象にした面談の場を設けた。小児看護の対象には家族も含まれ、2017年の看護学教育モデルコアカリキュラムにおいても、小児期にある人々に対する看護実践能力の一つとして「成長・発達そのものを家族とともに支える看護を実践できる」ことが挙げられている(文部科学省, 2017)。今回、事前に親と面談したことで学生は、[親子のやりとりからイメージできる日常の関係性] [親とのやりとりから理解する親の子どもへの接し方] など、親子との関わりを通じた情報収集により対象理解を深め、子どもに合わせた関わり方をすることが出来たのではないかと考える。小児看護学実習においても、共働き家庭やひとり親家庭などで実習期間に一度も親と関わる機会がない学生も少なくない。今回のように、学内演習で親子に協力を得ることは、小児の対象理解のみでなく、親子の関係性や、小児の理解を深めるためのツールとしての親へのかかわり方などを学ぶ機会にもなった。

また、今回グループの人数を4人~5人と少ない人数にしたことで、学生は演習に主体的に取り組み、子どもへの関わり方や測定技術による子どものリアルな反応に直面出来た。今回は、グループとして活動しながらも、個人個人で体験を深めてもらう狙いがあったこと、身体計測の項目が4つに加え、発達評価と面談という6つ以上の実施内容があったこと、ワールドカフェの適正グループ人数が4人であること、リングルマン効果から考えるとグループ人数が5人より増えると一人が発揮する力が70%以下になることなどを考え、人数を決定した。さらに、事前の準備を行う演習②において、全ての学生が必ず子どもと直接関わる機会をもつように役割分担するように指導したことも、学生の主体的な関わりに効果があったと考える。

しかし、演習②の授業時間が90分しか取れな

ったため、本来正確な評価を行うために必要な身体計測と発達評価における技術を準備する時間が十分に取れなかった。グループ毎に紙面に手順と留意点を記述するように指導したが、当日正しい方法で計測できないグループが複数見られた。学生は、事前準備や技術・知識の必要性に気づいていたという点は評価できるが、対象者に対する看護学生の技術レベルとしては十分でなかった。しかし、全体コマ数が決まっている中での演習であるため、コマ数を増やすことは難しい。学生の能力と準備に使える時間数などを再検討し、親子に協力を得る当日の演習内容について再構成が必要かもしれない。

最後に、1グループの人数を少なくすることで、依頼する親子の人数は増えるため、協力してくれる親子の確保について不安があった。しかし実際には、こちらが思っていた以上に看護学生の教育に興味を持ち、積極的に協力してくれる親が多いと感じた。また、ある母親は「一人っ子なので、お兄さんやお姉さんと遊んでほしかった」と言い、学生と手をつないで歩いているわが子を嬉しそうに見つめていた。今回、看護学生の対象理解と関わり方の実践能力を向上することを目的に親子に協力を得たが、参加した子どもにとっても、普段は関わる機会が少ない大学生とコミュニケーションをとる機会になり、親にとっては、いつもと異なる子どもの一面を見る機会になったことは、本演習の副次的な産物であったと考える。

V. 結論

演習を通して学生は、子どものリアルな反応に直面し、より具体的な子どもの特性と成長・発達段階の理解を深めていた。学生は、【体験を通しての実感】を得られたことで【対象理解】や【対象との関わり方】、【身体計測・発達評価の効果的な方法や工夫】の理解につなげることができていた。

今回は学生の学びに焦点をあて分析したが、演習に参加した親が得た思いなども分析し、学生と家族との関係性にも着目し、演習内容を洗練していく。今後は講義の中で、演習の記憶を繰り返し想起させる機会を作ることで演習の学びを定着させるようにしていきたい。

V. 謝辞

“身体計測・発達評価演習”にご協力いただきましたお子様とご家族に心より感謝申し上げます。

VI. 利益相反

本研究において記載すべき利益相反はない。

VII. 引用文献

- 兒玉尚子, 納富史恵, 藤丸千尋 (2009) 小児看護学における模擬患者を活用したコミュニケーション技術演習の検討. 日本小児看護学会誌, 18(1), 79-84
- 厚生労働省 (2011) 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書. 2021年10月10日アクセス, <http://mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000013l0q-att/2r98520000013l4m.pdf>
- 厚生労働省 (2019) 看護基礎教育検討会 報告書. 2021年10月10日アクセス, <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>
- 松澤明美, 白木裕子, 眞崎由香 (2021) 看護基礎教育課程における小児看護学シミュレーション演習 地域の母親が模擬患者として参加する演習プログラムの開発プロセス. 茨城キリスト教大学看護学部紀要, 12(1), 41-48
- 宮谷恵, 大見サキエ, 宮城島恭子 (2013) 教員から見た学士課程における小児看護実習の現状－実習形態と情報収集を中心に－, 日本小児看護学会誌, 22(2), 68-74
- 文部科学省 (2017) : 看護学教育モデル・コア・カリキュラム. 2021年10月8日アクセス, https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1217788_3.pdf
- 西田千夏, 合田友美, 中尾幹子 (2019) 看護系大学における小児看護学技術演習に乳児と母親が模擬患者として参加する意義 学生の学びと母親への影響. 香川母性衛生学会誌, 19(1), 9-16
- 西田みゆき, 北島靖子 (2005) 小児看護実習での学生の困難感のプロセスと学生自身の対処, 日本看護研究学会雑誌28(2), 59-65
- 糠塚亜紀子, 平元泉 (2004) 新生児・乳児モデルを使用した小児看護学演習による対象の理解の

- 導入としての効果. 秋田大学医学部保健学科紀要, 12(2), 145-151
- 山本裕子, 上山和子 (2016) 小児看護学実習での学生の学びの特徴 病棟中心と外来中心の実習内容から. 新見公立大学紀要, 37, 121-126
- 柳めぐみ (2010) 小児看護学の講義に幼児前期対象理解演習を取り入れて. 日赤医学, 62(1), 214
- 吉川未桜, 青野広子, 田中美樹ら (2015) 小児看護学演習における赤ちゃん先生プログラム導入の試み. 福岡県立大学看護学研究紀要, 12巻, 43-51
- 吉川未桜, 青野広子, 田中美樹ら (2016) 赤ちゃん先生プログラムを取り入れた小児看護技術演習の効果. 福岡県立大学看護学研究紀要, 13巻, 81-90